



飯田哲也・中川順子・浜岡政好編著

『新・人間性の 危機と再生』

布施 晶子

はじめに

20世紀初頭、マックス・ウェーバーは、彼が生きた「現代社会」、彼が普遍的官僚制化の時代と定義した、「人間の非人間化」が進行する「現代社会」の閉塞感を「出口のない時代」という言葉で表した。20世紀後半、アラン・トゥレーヌは「現代が直面している主要な社会問題は搾取から疎外に移った」と発言した。それから更なる歳月を経た現在、我々の日々の生活は「疎外」から無縁であろうか。「疎外」されていることの認識自体が弱められる状況下にあるとはいえないか。トゥレーヌが主張したように「搾取」とその結果としての「貧困」は過去のものになったか。否、「北と南」の格差のみならず、豊かといわれる「北」における格差も解決されていない。日々、教壇から若者たちに接する教員の一人として、ペシミスティックになるまい、展望を示そうと心しつつも、ウェーバーの「出口のない時代」という表現がより深刻化した如くにも見える21世紀初頭の時点にあつて、試行錯誤の日々である。そのような時に『新・人間性の危機と再生』が刊行された。

本書は、関西を中心に活躍する10名の社会科学者たちの合作である。本書のキーワードは「人間性の危機と再生」、1988年に刊行された同名の書『人間性の危機と再生』の反省を踏まえ、以下のコンセンサスのもとに執筆された。

1. 「人間性の危機」の一般的性格の共通認識に立ち、戦後50年余の変容と現局面の把握をとおして、「人間性」をキーワードにしたとき、現代社会はいかなる歴史的位相にあるかを明らかにする。

2. 人間性一般を論じるのではなく、人間性の形成や現状と深く関わる諸領域（具体的には、

暮らし、子ども、愛と性、病理、夫－妻関係、都市計画、地域社会、熟年の職場、老い）ごとの具体的な認識から追上げるアプローチをとる。

3. 問題状況のマイナス面とともにプラス面にも着目、現状打開に向けての萌芽を探り、「人間性の再生」の方向性を提示する。

本書を通読して、今更ながらに、いま私たちが置かれている状況の厳しさ（人間性の危機）に思いを致した。各論の執筆者のそれぞれが、上記のコンセンサスを共有し、問題状況を克服する手だてや方向性（人間性の再生）について、飾らない言葉で展開している姿勢に共感するところが大きかった。と同時に、このマンモスのように巨大でアメーバのように融通無碍の現代社会における「人間性の危機」の構造的な把握と「再生」へ向けて海図を展開することの難しさを、今更ながらに思い知らされました。

全体の構成

紙幅の関係があり、各章の骨子について紹介できないのが残念である。本書は11章からなり、序章「人間性の危機としての問題状況」（飯田哲也）の総論的展開に続き、以下、第1章「豊かな社会」の揺らぎと貧困の新しいかたち」（浜岡政好）、第2章「現代における子ども問題」（高原正興）、第3章「現代における愛と性」（松村尚子）、第4章「日常世界における病理」（魁生由美子）、第5章「現代の夫－妻関係」（中川順子）、第6章「都市計画から参加のまちづくりへ」（乾亨）、第7章「地域社会の多様性の喪失と再生」（河原晶子）、第8章「現代熟年の職場問題」（長沢孝司）、第9章「老い」の変貌と再生」（高橋正人）と各論部分が続き、最後に、終章「日本社会と人間性の再生」（飯田哲也）にお

書 評

いて総括を行う構成をとっている。総論にせよ、各論部分にせよ、それぞれが著書としての展開が必要なほどの重要な論点を抱えており、限られた紙幅のなかでの展開に苦労されたであろうことが随所に伺われた。にも関わらず、例えば環境問題、若年層における失業者の滞留状況、マス・メディアにみる文化的貧困といったテーマもまた、今日、我々が「人間性」について語るとき欠かせない。何よりも今日の「人間性」のありようと深く関わる政治＝経済体制の展望、国家のありよう（汚職を許す仕組みも含めて）もまた避けてはとおれない。その意味では、章立てにおいて、いま少し取捨選択、統廃合の工夫がなされると、より構造的に「人間性の危機」に迫れたのではないかと考えた。

「人間性の再生」について

今春、芝田進午さんが亡くなられた。偲ぶ会の案内状を前に、改めて人間の幸福を願うすべての人びとにとって、まず生命が基本であり、その生命を擁護することが共通の目的であることを明示し、「生命の権利」の延長線上に科学研究を位置づけ実践した芝田さん、「生命を再生する死をも殺してしまう…この共同の敵を打ち破ろう！」というサマヴィルの言葉を絶筆の一つとして書きとめ、核時代に生きる意味を問いかけた芝田さんの温顔を思い出している。院生時代、赤線をひきながら読んだ『人間性と人格の理論』（青木書店、1961）の冒頭に、次のような指摘があった。

「歴史上、今日におけるほど「人間性」(Human Nature) とはなにか、「人格」(Personality) の尊厳とはなにか、「個性」(Individuality) とはなにかという問題が、かくも多くの人びとによって真剣に問われたことはない。」そして、資本主義のもとでの人間の非人間化についてふれたあと、次のように述べている。「独占資本主義の下での光景とは対照的に、すでに人類の三分の一の人びとが建設している社会主義の世界では、人間性の回復、人格の全面的発展、個性の解放が社会主義的民主主義の任務の一つとして提起されている。」そこには、私も含めて、「疎外された人間性の回復」に向けて疑うことなく展望

した一つの政治＝経済体制が浮かび上がる。しかし、いまさら指摘するまでもなく、1980年代から1990年代にかけて、「社会主義」の旗を掲げた国々における人間の非人間化状況がマス・メディアを通じて世界中の人々の脳裏に焼き付けられた。私たちが、21世紀の初頭において「人間性の再生」について展開するとき、20世紀におけるソビエト連邦に象徴された「社会主義」体制の崩壊という動向と、それに続く資本主義美化論の謳歌という思想的潮流を見据えた、率直な自己批判と資本主義美化論を事実をもって覆す勇気ある営為が必要であろう。

本書の各論において提示された今日の日本における「人間性の危機」の実態は、事実の重みをもって資本主義美化論に対抗する役割を果たしている。これに対して、本書が特に力を注いだという「人間性の再生」に関する展開は、終章も含めいずれの章からも、執筆者の真摯で懸命な息吹は伝わってくるし、個別には教えられるところが大きであるが、構造的な海図が描かれているかという点では疑問が残る。それは、おそらくは、先に述べた、21世紀の政治＝経済体制についての展望、国家・社会のありようへの踏み込みを禁欲した営為とつながるのであろう。

冒頭に述べたように、マックス・ウェーバーが「出口のない時代」と表現した20世紀は、確かに官僚制の深化と世界的規模の戦争が陸続と起こった世紀であった。しかし、抑圧されてきた民族の解放、女性・青年・心身障害者・子どもそして高齢者といった従来、声なき民であった人びとが本来の人間性を取り戻す為の第一歩を踏み出した世紀でもあった。その意味では、決して「出口のない世紀」に終わりはしなかった。こうした歴史を踏まえてみると、人間性の再生へ向けての21世紀の展望を描くことは可能と見る。本書が企画した「具体的な認識から追いつける」アプローチと全体社会の展望を見通すアプローチがあいまったとき、より構造的に人間性の再生に向けての道筋を描けるのではないかと考える。

（法律文化社・2001年4月刊・2600円）

（ふせ あきこ・札幌学院大学）